

平成29年度開発手法

障害者（要支援者）を理解し、支援方法を検討するための手がかりとなる

『障害者（要支援者）家族向けLODESTAR（ロードスター）チャート図』

の使い方

| | | |
|--|--|--|
| 避難行動 (発災後、避難所までどうやって逃げるか?) | 避難所での医療 (常用薬や電源や水はあるか、万一の時に医療は受けられるか) | 避難所での食事 (強度の偏食、アレルギー対応) |
| 理解者・協力者の確保 (症状や特徴について理解してくれる人をどう増やすか) | 障害者や家族の抱える困難と解決したい課題 | 避難所での排泄 (トイレに入れるか、迷惑をかけないか、オムツはあるか) |
| 理解のない人への対応 (トラブルが起った際にどう対応するか) | 避難所での居場所 (寝られるか、パニックを起こさないか、迷惑をかけないか) | 避難所での衛生管理 (お風呂に入れるか、着替えはあるか、迷惑をかけないか) |

1. 目的

障害者、とりわけ発達障害や精神障害など目に見えにくい障害者については、行政職員、社協職員、民生委員でさえ十分な知識・認識がない場合が多い。ましてや一般住民で、これらの障害について深い理解を持つ人は少ない。

そんな中で、これらの障害を持つ方々が災害発生時、上手く逃げることができるだろうか。また、避難所へ到達できたとして、どうやったらそこで避難生活を送ることができるのだろうか。これらを知る人々はあまりにも少ない。

このような状況を解決・改善せずに、障害者を避難所へ収容することが可能といえるのだろうか。

行政では災害時要支援者支援計画の中で「福祉避難所」の指定を行っているが、普段でさえ定員いっぱいの施設が多い中で、これらを福祉避難所に指定するだけで災害時に機能すると考えているのだろうか。施設建物が被災するケースも想定されるが、それよりも施設職員が被災して職員不足となる場合も懸念される。

一方、障害者を抱える家族たちの中には、あまりにも無理解・無関心な周囲を見て孤独感に苛まれ、また、対応不足な行政の状況に絶望感を抱き、そこから目を背けよう（考えたくない）と逃避する方々もいる。

このチャート図は、次のような目的のため考案された。

- ① 障害者自身やその家族が抱える「災害発生時の困りごと・不安」について、可能な限り詳細に調査する。また調査を通して障害者を抱える家族の覚悟や意識改革を促す。
- ② 可能な限り①の情報の可視化と情報の共有化を図る。共有化はまず障害者の家族同士の相互共有から始める。
- ③ 前述①の情報を、行政職員、社協職員、民生委員、自治会リーダーなど、障害者やその家族が災害時等に頼れる可能性を持つ地域人材に見てもらい、障害者（とりわけ“目に見えない困難”を抱える障害者）の困りごとやニーズに関してより深く理解してもらう。
- ④ 最終的な目標は、前述①～③の内容を、地域コミュニティで取り組み、災害時にも平時にも強い見守り体勢構築につなげることである。

2. チャート図の活用方法

- (1) 第1段階：障害者を抱える家族が自分の家の問題としてやってみる
- チャート図の外辺の8つの項目に関し、障害者を抱える家族一軒一軒がそれぞれ自分の家のことを考え、ポストイットに書き出してみる。
 - 家族に障害の状況を冷静に見つめさせることで、災害困難時の艱難から目を背けさせないようにする。

| | | |
|---|---|---|
| 避難行動 (発災後、避難所までどうやって逃げるか?) | 避難所での医療 (常用薬や電源や水はあるか、万一の時に医療は受けられるか) | 避難所での食事 (強度の偏食、アレルギー対応) |
| 理解者・協力者の確保 (症状や特徴について理解してくれる人をどう増やすか) | 障害者や家族の抱える困難と解決したい課題 | 避難所での排泄 (トイレに入れるか、迷惑をかけないか、オムツはあるか) |
| 理解のない人への対応 (トラブルが起った際にどう対応するか) | 避難所での居場所 (寝られるか、パニックを起こさないか、迷惑をかけないか) | 避難所での衛生管理 (お風呂に入れるか、着替えはあるか、迷惑をかけないか) |

ちなみに次ページの表は、「避難所で困ること、想定されるトラブル」についての質問に対し、鈴鹿市療育センターに子どもを通所させている親21名からの回答結果である。

この内容から見ても、チャート図の枠組みが的を得たものであることがわかる。

| | |
|----|---|
| | 避難所で困る事、想定されるトラブルは？ |
| 1 | ●体調管理 |
| 2 | ●狭い部屋やうるさい部屋では長い時間居られない。 ●静かにしていられない。 ●大勢の人がいると心配。 |
| 3 | ●いつもと違うことで起きる子供の不安、パニック ●ライフラインの確保 |
| 4 | ●下痢、嘔吐したとき |
| 5 | ●トイレ ●音がうるさいかどうか ●空間が区切れるかどうか |
| 6 | ●奇声をあげる。 ●みんなが疲れたりイラついているときに、大きな声で思ったことを言って、みんなのイライラを募らせる。 ●寝ている人の上(特に高齢者や乳幼児の上も)を走る。 |
| 7 | ●食べ物に偏りがあるので、食べるものがない |
| 8 | ●慣れない場所になるので、パニックになったり落ち着かない |
| 9 | ●人が多くてトイレがすぐに使えない。 ●停電、断水 ●情報をどう得るか |
| 10 | ●普段の生活と違うことで、場所、人、周りの状況が理解できず、パニックになってしまう。 ●落ち着くことができない。 |
| 11 | ●子供のトイレ、オムツ ●もし病気になったら |
| 12 | ●知らない人と近くで静かに過ごせない。 ●支援物資だと好き嫌いがあって食べられない。 |
| 13 | ●初めての場所、人が苦手。 ●音に過敏 ●偏食があるので食べ物が心配 |
| 14 | ●人が多く落ち着かない。 ●トイレ ●子供の声、場所が狭い |
| 15 | ●トイレ(オムツ) ●広すぎる空間 |
| 16 | ●寒い、ザワザワしている。 ●眠れない、食べるものがない。 |
| 17 | ●体育館だとプライバシーが保てるのか心配 ●隣の人の近い話し声などが気になる。 |
| 18 | ●病気のため病院にいけるか |
| 19 | ●病気なので薬が必要。いいわけがない。 ●自分の頭痛がいつ起こるかわからない。 |
| 20 | ●泣き声などで寝られない |
| 21 | ●離れた住む家族の安否 |

(2) 比較的交流を図りやすい環境にいる障害者家族が一堂に会して、ワークショップスタイルでやってみる

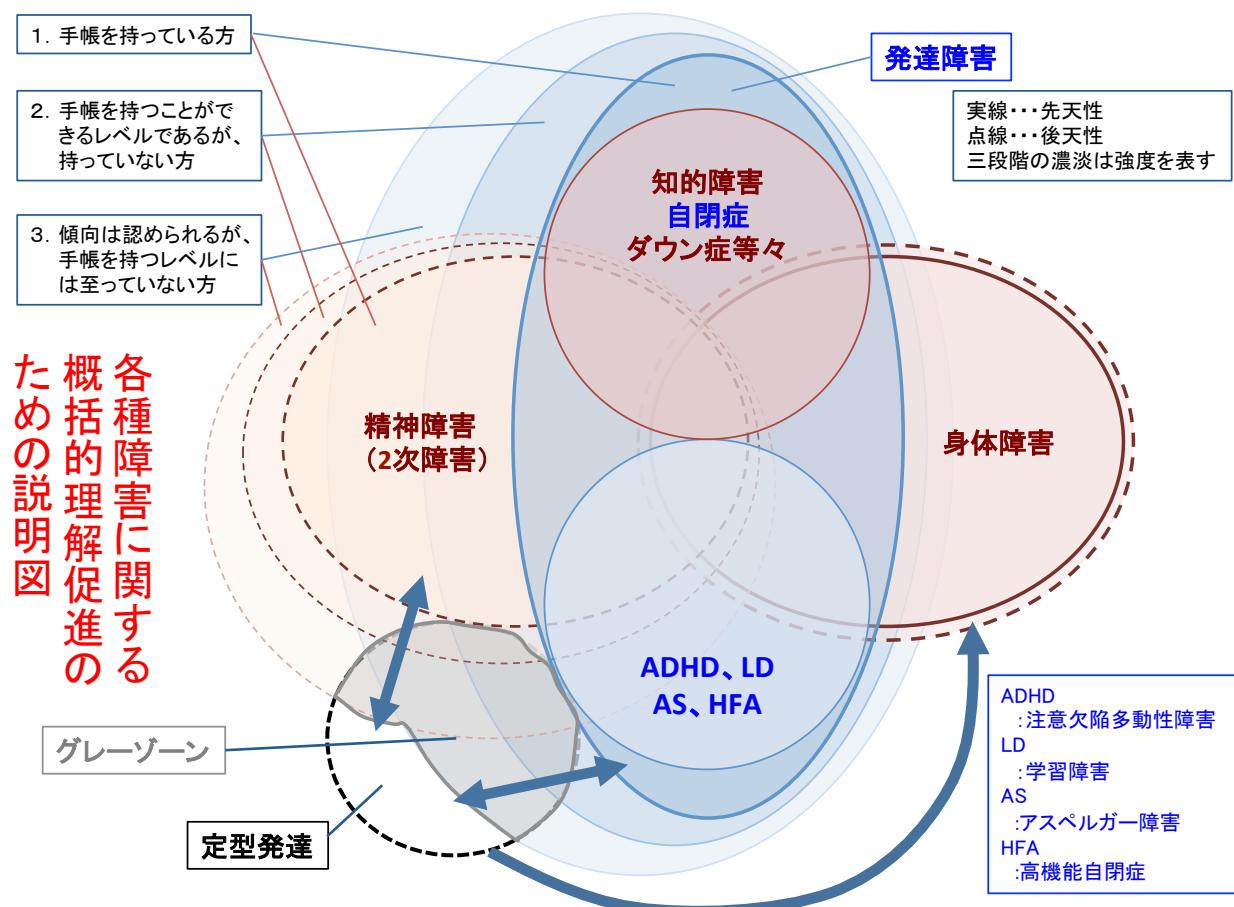
● (1) の作業を障害者家族のグループで、ワークショップスタイルでやってみる。各人「1項目毎に1枚のポストイット」に記入し、模造紙に描かれたチャート図の上の該当する場所に貼りこんでいく。

- 各項目毎にお互いの意見を報告・発表しあい、障害者家族同士での共有を図る。

(3) 障害者家族の出した意見を近隣住民たちが勉強会で学ぶ

- 前述(1)や(2)で、障害者家族から出された意見等の結果を題材として、それらを行政職員、社協職員、民生委員、自治会リーダーなど、障害者やその家族が災害時等に頼れる可能性を持つ地域人材に見てもらい、障害者（とりわけ“目に見えない困難”を抱える障害者）の困りごとやニーズに関してより深く理解してもらう。

- また、障害に関する概況を学んでもらう（下図参照）。



- 学んでもらった後には、ワークショップで「支援方法」や「災害発生時の注意点（次表参照：鈴鹿市での検討事例）」などを考えてもらう。支援計画書案（次々表参照）を検討することも

災害時に注意すべきポイント

【避難行動時】

- パニックを起こしやすい(テコでも動かなくなることがある)
- いつも通る道や練習していた道しか通らないという子も少なくない
- 珍しいもの(火災など)に興味を持って飛び込んでいくこともあり得る
- 避難滞在場所で、その子だけに必要となる物資や道具、薬などを持つて逃げる

【避難滞在時】

- 周りに知らない人がいるとパニックを起こす子がいる。→ASDへの対応策
- 狭い空間、見通せない空間が必要な子がいる。→ASDには多い。
- 多動ゆえに、周りの人から迷惑がられることが多い子がいる。→ADHDへの対応策やテクニック
- 障害を持つ子には重い偏食を抱えた子が少くない。
- 障害を持つ子にはアレルギー(とりわけ食物アレルギー)を抱えた子も存在する。

【小規模私設福祉避難所の必要性と提案】

- 行政が指定の福祉避難所は、従来私設の焼き直しが多い。→受容力がアップするわけではない。
- 従来専門家だけではマンパワーが不足する。それに専門家も被災するかもしれない。
- 障害のタイプや症状の状況に合わせた小規模対応が不可能か？

【専門家でなくても理解者と支援者を増やしていくことの必要性】

- まずは、障害者の家族自身が最大の理解者兼支援者として機能できる環境を整えることが大事ではないか。
　　<ファミリーが主体的支援者・第1支援者となる>
- 個々の障害者の状況を理解して、その障害者と家族に対する必要な支援を理解しておくことが重要ではないか。
　　<地域の理解者が障害者に対する第2支援者となる>
- 似たような障害を持つ障害者のファミリー同士の連携を支援していくことが必要ではないか。
　　<似たような障害を持つ障害者の家族は、お互いの状況を理解しやすいし、協力しあえる可能性がある。>

(4) 障害者家族と近隣住民とが一堂に会して、ワークショップスタイルでやってみる

●障害者本人及び障害者家族と、地域のリーダーや近隣住民が一堂に会して支援のニーズや支援方法を検討するという段階が、一応の最終目標となる。ここまで漕ぎ着けられたならば、公設避難所以外に『私設の任意の避難所』の開設や運営が可能なレベルが近づく。

●支援計画書（次表及び次々表の事例参照）も検討することにも挑戦したい。

マンションでの避難行動支援計画検討事例 (発災の想定【災害の内容：震度6強の地震。物資の確保等の面から避難所に向かう。】)

| 住戸 No | 要援護のタイプ | 避難の想定 | 必要になるサポートの内容 | 必要となるサポートの人数 | サポートーとなれる人は？ |
|-------|--|--|---|--------------|--------------------------------------|
| 602 | 意思疎通が不自由（ダウン症） | ・垂直避難（下の階） ・外部への避難（避難所） | コミュニケーションをとりながら避難してもらうためのサポートが必要。 | 2～3人 | 家族と701のNさん（コミュニケーションが取れる） |
| 803 | 身体の不自由（心臓にペースメーカー） | ・垂直避難（下の階） ・外部への避難（避難所） | ペースメーカーが正常に作動していれば大きな問題はないが、誰かが注意してあげた方がいい。 | 1～2人 | 仲が良くて鍵も預かっている別棟のKさん |
| 1007 | 意思疎通が不自由（外国人） | ・垂直避難（下の階） と外部への避難（避難所） | 避難所へ避難することの説明をしてあげる必要。 場合によっては避難所まで同行避難してあげる必要。 | 1人 | 105、106、207、305など（普段からのコミュニケーションが必要） |
| 606 | 身体の不自由（車椅子） | ・自宅避難がベター ・または垂直避難（下の階）と外部への避難（避難所） | 万一自宅避難ですまない時には、避難所等へ避難が必要になる。 1階まで車椅子で降ろすことが必要。 | 4～6人 | 206、506、607、307 |
| 810 | 身体の不自由（足が不自由） 意思疎通が不自由（認知症） ※要介護認定を受けており、デイサービスへ通っている。 | 認知症のため、自宅避難が好ましい。外部避難は家族が一緒でないと難しい。 | ・歩行困難のため、担架が必要。 ・一般的の避難所では認知症進行が懸念されるため、可能な限り介護施設などへの避難を考える。 | 4人 | ・上下階の住人（710、910）など |

避難生活支援計画シート事例 (発災の想定【災害の内容と復旧までの想定期間：大震災のため長期間の自宅外避難が必要】)

| 住戸 No | 要援護のタイプ | 避難の想定 | 必要になるサポートの内容 | 必要となるサポートの人数 | サポートーとなれる人は？ |
|------------------|-------------------------|---|--|--------------------------|---|
| 1丁目1-20 -103号 | 意思疎通が不自由 (発達障害：自閉症) | ・一時的には中学校へ避難（体育館でなく教室など希望） ・その後専門施設へ移動希望 | ・人が大勢いるところ、初めていく場所ではパニックを起こすことがある。 静かで小さな空間を求みたい。 ・極端な偏食で、コーラとマカロニしか食べない。火を含め常に準備必要。 | 家族に加えて本人が拒絶しない人 | 家族に加えて203の奥さん |
| 1丁目18-2 -201号 | 意思疎通が不自由（発達障害：注意欠陥多動障害） | ・一時的には中学校へ避難（他の避難住民に迷惑をかける可能性） | ・じっとしていられない。放っておくと走り回るので、他の避難住民の方からクレームが出る。 ・常に体を動かせて、適度な疲労感を与える工夫が必要。あるいは作業を与えるなどの工夫も必要。 | 家族だけでは疲れるので、症状に理解のある人が数人 | コミュニティの住人たちに発達障害についての研修講座を開き、人材を育成する必要。 |